

平成 31 年第 2 回

札幌市教育委員会会議録

※ 非公開に係る議案（議案第 1 号）を除く

平成31年第2回教育委員会会議

1 日 時 平成31年1月31日（木） 13時30分～14時19分

2 場 所 S T V北2条ビル4階 教育委員会会議室

3 出席者

教 育 長	長谷川	雅 英
委 員	池 田	官 司
委 員	阿 部	夕 子
委 員	佐 藤	淳
委 員	石 井	知 子
委 員	道 尻	豊
教育次長	山 根	直 樹
生涯学習部長	鈴 木	和 弥
学校教育部長	檜 田	英 樹
教育推進・労務担当部長	早 川	修 司
教育課程担当課長	廣 川	雅 之
企画担当係長	野 田	隆 之
義務教育担当係長	大 井	一 雄
児童生徒担当部長	長谷川	正 人
教職員担当部長	紺 野	宏 子
教職員課長	榊 原	直 志
服務・人事制度担当係長	富 本	智 也
人事係員	小 澤	郁 哉
総務課長	宮 地	宏 明
庶務係長	札 場	義 章
書 記	山 本	裕 奈

4 傍聴者 4名

5 議 題

報告第1号 平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について
議案第1号 札幌市情報公開・個人情報保護審査会の答申に係る裁決書案
について

【開 会】

○長谷川教育長 これより、平成31年第2回教育委員会会議を開会いたします。

本日の会議録の署名は、石井知子委員と道尻豊委員にお願いいたします。

本日の議案第1号は審査請求に関する事項でございます。教育委員会会議規則第14条第5号の規定により公開しないこととしたいと存じますが、いかがでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○長谷川教育長 それでは、議案第1号は公開しないことといたします。

【議 事】

◎報告第1号 平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について
○長谷川教育長 議事に入ります。報告第1号 平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果についてです。事務局からご説明をお願いいたします。

○学校教育部長 報告第1号 平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果の概要について、ご報告いたします。

今年度の調査結果については、平成30年12月20日（木）に、スポーツ庁が全国及び都道府県、政令指定都市ごとの結果を発表しております。本日は、札幌市の結果の概要を報告いたします。

それでは、資料1の左側、平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果（小学校）をご覧ください。まず、表の見方や記号についてご説明いたします。

始めに表の見方についてですが、表の中に「T得点」という表記があります。

ここで用いているT得点とは、全国平均を50点とし、その全国平均値に対して、どのくらい上回っているか、下回っているかをあらわす、偏差値のような数値となっております。

例えば、小5男子の「握力」、「H30札幌」の欄を見ていただきたいのですが、「51.2」とあります。これは、全国平均を1.2ポイント上回っていることを意味しています。また、このように全国と同等または上回っているものについては、網掛けで示しています。

次に、表の中ほどの「20mシャトルラン」の欄をご覧ください。「47.2」の数字の前に☆印が付いています。これは、前年度「H29札幌」の得点「46.8」を上回っていることを意味します。このように前年度に比べて得点が上昇しているものは、☆印で示しています。

なお、T得点につきましては、50点のプラスマイナス1～2程度に位置していれば全国平均に近いといえます。

次に、表の1番右端の欄をご覧ください。「体力合計点の平均値」とありますが、この数値は、全児童生徒の体力合計点の平均値です。体力合計点とは、表にある「握力」から「ソフトボール投げ」までの8種目の記録を10段階、つまり1～10点でそれぞれ点数化し、合計したもので、満点は80点となります。

それでは、結果の概要につきまして、ご説明いたします。

まず、「実技」に関してですが、資料1の左側、小学校についてです。

男女とも体力合計点の平均値は、全国平均値と比較すると低い状況にあるものの、女子については、ここ3年間、向上し続けており、改善の兆しが見えております。男子は、昨年度より低くなっております。

種目別に見ると、男女とも握力が全国平均を上回っております。また、昨年度と比較して、男子では1種目、女子では4種目のT得点が高くなっております。

次に、右側の中学校についてですが、男女とも体力合計点は、全国平均値と比較すると低い状況にあるものの、男女ともに昨年度より高くなっております。女子については、ここ5年間、少しずつではありますが、向上し続けております。

種目別に見ると、男女とも全国平均を上回っている種目はありませんが、昨年度と比較して男女ともに6種目で、得点が高くなっております。

「実技」に関しては、体力合計点では、全国と比較するとまだ低い状況にありますが、小学校女子、中学校男女で、改善が見られるということ、また、種目で申しますと、小中男女とも、20mシャトルランに伸びが見られ、課題であった持久力が向上しております。

資料下段のレーダーチャートをご覧ください。これは、種目別のT得点について、全国と札幌の値を比較したもので、青が全国、赤が札幌市を示しています。全国と比較するとまだ低い状況にありますが、小学校男子については、全体的に全国平均に近い値が多くなっております。また、小学校女子についても、全国平均に近づいている種目が複数見られます。中学校男子については、全国平均に近い値を示している種目が多くあります。中学校女子は、依然全国平均との差が大きい種目が多いものの、その差は縮まってきております。

次に、資料2-1をご覧ください。これは、小学校の種目別平均値について、札幌市と全国及び北海道の値の経年変化を表したものです。青の点線が全国、オレンジの実線が札幌市の平均値を示しています。また、平成29年度から公表されております、札幌市を除く北海道の平均値につきまして、灰色の実線で示しております。

小学校については、特に女子で全体的に向上傾向にあることがうかがえます。一方、男子については、下降傾向にある種目がいくつか見られます。男女ともに全国との差が大きかった、20mシャトルランについては、向上傾向が見られます。

続いて資料2-2の中学校の経年変化をご覧ください。こちらも小学校同様、男女ともに20mシャトルランに伸びが見られます。また、種目全般に全国との差が大きい中学女子についての経年変化を見てみると、ほとんどの種目で向上傾向が見られます。男子については、昨年下降していた種目に改善が見られ、体力合計点も向上しております。

以上、実技調査の結果の概要についてご説明しましたとおり、全般的には、札幌市の子どもたちの体力・運動能力は、改善の傾向が見られ、各学校における「健やかな体」育成プログラムに基づく取組の成果が、現れてきているものと捉えておりますが、札幌市を除く北海道の結果と比較すると、全体的に札幌市が下

回っております。

全国的な傾向として、大都市及び中核市の結果は、その他の都市や町村、へき地を下回る傾向が見られております。これは、都市の規模や立地などによって、子どもたちの生活スタイルが異なることが影響しているものと思われま

す。また、以前、ご指摘をいただいております、札幌市が降雪地域であることの影響についてですが、他の都府県や指定都市の結果を比較してみたところ、降雪地域の結果は、必ずしも低いとは言えないということが分かりました。例えば、降雪地域の一つである福井県の平均値は、例年全国平均と比較して高い値となっております。

続きまして、資料3の児童生徒質問紙調査の結果の経年変化をご覧ください。左側が小学校、右側が中学校の結果です。赤い折れ線グラフが全国、棒グラフが札幌市を示しており、青が男子、オレンジが女子です。

上段の「運動やスポーツをすることが好き」、中段の「体育の授業は楽しい」と考える子どもの割合は、小・中学校、男女ともに、全国と比べて、ほぼ同程度を維持しており、意識の高さがうかがえます。また、小学校につきましては、男女とも全国平均を上回っている結果となっております。

また、下段の「体育の時間を除く1週間の総運動時間が60分未満の子どもの割合」は、中学校女子で改善の兆しが見られておりますが、全般的にはほぼ横ばい

です。全国平均と比較すると、小学校は男女ともにほとんど運動をしない子の割合は低いものの、中学校では逆に増加する傾向が見られます。今後とも、ほとんど運動をしない子どもを減らすための取組を進めていく必要があると考えております。

以上が今年度の調査結果の概要となります。教育委員会といたしましては、今後、札幌市の結果を各学校に伝えるとともに、自校の調査結果を踏まえて「健やかな体」育成に係る取組の工夫改善を図ることや、保護者や地域の方と学校の取組の成果や課題を共有することなど、調査結果を効果的に活用するよう促してまいります。

また、大学等の専門機関と連携し、これまでの全国調査の結果や各学校の取組の成果等について、改めて詳細に分析、検証をした上で、札幌市の子どもたちが、健康の大切さへの理解を一層深め、自ら運動に親しむことを通じて体力・運動能力を高めていけるような新たな方策を引き続き検討して参りたいと考えております。説明は以上でございます。

○長谷川教育長 ありがとうございます。それでは、ご質問、ご意見等がありましたらお願いいたします。

○佐藤委員 ご報告ありがとうございます。小5男子は少し残念でしたが、小5女子、中2男子、中2女子は前年度を上回る結果となっており、何よりと思います。これは、今まで続けてきた体力向上の実践研究授業などが功を奏しているのだと思います。小5男子は前年度を上回りはしませんでした、落ち込みもしていないので、それほど心配はしていません。

ただ、やはり小5についても中2についても、どちらかという足を使うタイプの運動が全国に比べて、やや低い傾向が強く出ている気がするので、総合教育会議でも申しましたけれども、弱点部分に特に重点的に補えるような工夫を今後やっていけると良いと思っています。

また、資料3の下の「体育の時間を除く総運動時間が60分未満の児童の割合」について、小学校の方は全国より、若干ではありますが、「60分未満」は少なく、良い傾向であるわけですが、中2になると、男子女子ともに、全国を下回ってしまう結果になっています。これまでホームページ上で公開されている実践研究授業の各校の取組などを見ましても、小学校では色々な工夫がされているのに対して、中学校はホームページ上ではあまり見あたらなかったのも、小学校と中学校で何か取組に差があるのか、実践研究授業で出されているプランなどに数的に差があるのか、そのあたりの状況を教えていただければと思います。

○学校教育部長 資料3の「体育の時間を除く総運動時間が60分未満の児童の割合」ですけれども、小学校は数年前から、なわとび運動を日常的に行っており、加えて、運動する環境の整備で、冬場であってはグラウンドに的当てを作ったり、夏場は「けんぱ」ができるスペースを意図的に作ったり、小学校の方では工夫をしていただいております。小学校のなわとび運動の継続性という点で、中学校の方は課題がありまして、どうしても運動の部活動をやっている子と、そうでない子の二極化が進んだ結果がこのようなかたちになっていると考えられます。そのため、各中学校で、体育の授業だけではなく、それ以外に生徒会の活動でありますとか、保健の常任委員会ですとか、学年のレクリエーションですとか、色々な機会を通して、子どもたちが体を動かす楽しさや喜びなどを感じる機会をつくる工夫ができるよう、総合教育会議での議論と重なりますが、そうしたことを次年度の我々のプランの方にもしっかりと位置付け、各学校でもプログラムに反映してもらうような取組を進めていきたいと考えております。

○佐藤委員 ありがとうございます。今おっしゃった二極化という部分がおそらく問題だと思うのですが、これまでの取組の中で、文化系部活動のスポーツ大会などは本当に優れた取組だと思いますので、そうした運動しない層に向けてのアプローチを今後ご検討いただければと思います。

○阿部委員 3点ほどあります。2点が確認、質問で、3点目が意見になります。

まず、小学生は男女ともに「握力」が平均を上回っているという結果が出ていますけれども、これについて各学校で工夫などをされていると思うのですが、ここだけが4年間ずっと平均を上回っているのは、どのような工夫によるものなのかまず知りたいのと、それが中学生になると平均を今度は逆に下回っている結果になっているので、小学生の時と中学生になる時とで、生活スタイルによって違っているのかなど、そのあたりの理由が何かわかるようであればお伺いしたいと思います。

3点目の意見としましては、各種目の中でも平均を上回っている「握力」を調査分析することによって、それが他の種目への良い影響になっていく、ということも考えられるので、そのあたりを分析することで、他の種目のT得点の底上げができるのではないかと感じます。

○義務教育担当係長 まず、なぜ「握力」が高いのかということについて、明確に理由を特定することは難しいですが、以前、大学の体育専門の先生に伺ったところ、北海道の子どもたちは体格が比較的よく、例えば身長や体重が全国平均を上回っているので、体格がよいと、筋肉の量自体が多いということで、「握力」という種目は全身の筋力を測る指標になっているのですけれども、そういったことではないかというお考えを伺ったことがあります。ただ、握る力をもって、全身の筋肉の状態を全部は測れるわけではないのですけれども、考え方としては体格との関係ということもあるのではないかと思います。

ただ、小学生は高いが中学生になるとなぜ低くなるかということについては、理由を特定することは難しいところです。

○阿部委員 個人的な意見で、専門家ではないのでわかりませんが、なわとびをやる時、なわをつかむ行為が「握力」に反映されているということはなさそうでしょうか。

○義務教育担当係長 それも関係あるかないかはわかりませんが、なわとびはあまり強く握るとあまり回せなくなるということもあります。

○阿部委員 それではあまり因果関係はないですね。そこを明確にすることは難しいかもしれないのですが、今後、検証や分析をされる時に、このあたりを注力していただくと他の種目の得点の底上げにも繋がるかと思いましたが、分析などをやられる際に、わかる範囲で行っていただけたらと思います。

○義務教育担当係長 先ほど部長からもお話しさせていただきましたが、今後、大学等の専門機関と連携しながら、今、ご指摘のあったことなどを詳細に見ていきたいと思っております。

○阿部委員 お願いいたします。

○長谷川教育長 ほかにいかがでしょうか。

○石井委員 意見というか、感想になりますけれども、全体的に小5女子、中2男子、中2女子の得点が少し上向きになってきていることは良かったと思えました。

少し話しがずれてしまうのですが、先日、民間の子ども向けの体操教室をされている先生とお話しをする機会があり、子どもの運動量や、運動習慣の話しをしました。その時に、人間の動きというのは、大まかに分けると36個の基本動作に分かれており、それを幼少期にいかに身に付けているかで、大人になった時にどれだけ運動ができるかということが決まるというお話しをされてきました。生活様式が変わってきているので、基本的な動作ができない子が増えているというお話もされていて、もしかすると、北海道や全国に比べると、札幌の子どもたちは全国平均の点数が低いので、もしかすると幼少期にその基本的な動作を習得できずに成長している子が多いのかなと、資料のグラフを見て思いました。「握力」が札幌市の子どもたちは高いということを知っていたので、その先生に聞いてみたのですが、先生は、雪かきする習慣があるからではないか、ということをおっしゃっていました。やはり幼少期にいかにその基本動作、歩くとか、跳ぶとか、投げるとか、掘るという動作の事を言うらしいのですが、そういう基本的動作を習得することを幼少期に心がけるようにして、外遊びをさせてください、とも先生はおっしゃっていました。

そう考えると、調査対象の種目である「握力」「上体起こし」などは基本動作がほとんどなので、幼少期にいかに動いたかということが影響しているのかなと思いました。もちろん小学生や中学生の体力の底上げのために学校で行うことも大事ですが、幼稚園や保育園でも、基本的な動作をするような遊びを取り入れて、長い目で見て、この調査に向けてではないですが、大人になった時に色々な動きができるようにして欲しいなと思いますし、保護者としても、やはり幼児期のうちから、危ないからさせない、ということではなく、色々な動きをされて遊ばせなければならぬなと思いました。

○学校教育部長 この調査自体は小学校5年生と中学校2年生を対象としてい

ますが、小学校1年生のうちから、8種目全部やるということではなく、できる年齢に応じた色々な動きを学校でもやらせて、それが学年進行と共に、去年よりも回数が増えたとか、自分で目標を持ってだとか、去年まではこうだったけれど、一年経ったらこういうふうに伸びたとか、それが5年生の調査の時にある成果となって見えてくるということもあるので、学校によっては通知表にそういった欄を設けて、子どもたちの伸びを保護者の方にもわかるように工夫しているところもございます。そういう良い取組を色々な機会を通してできるように、さっぽろっ子「学び」のススメとあわせて、伝えて参りたいと思っています。

○道尻委員 資料の1を拝見しますと、先ほどのご説明にもありましたが、「反復横跳び」とか「持久走」とか、持久力に関わる種目が少し低めなのかなと思います。これは降雪地域であって、冬がかなり全国に比べると状況が違うということで、例えば体育の授業で行う内容が違ってくるとか、あるいは体育の授業以外で色々な運動に取り組む子どもの状況が違うからとか、そういう原因があるのかどうなのか、ということと、そのような分析が可能なのかどうなのかということが一点と、この持久力をどうやって増強していくかというところで、もし何かお考えになっていることがあれば、教えていただきたいです。

○学校教育部長 先ほども触れさせていただきましたが、東北や北陸などの降雪地域のそれぞれの県の平均値を比較させていただいたのですが、特に降雪地域ということと体力や運動能力との相関はあまりございません。そのため、冬は雪が多いから運動ができないという短絡的な原因といいますか、そうしたことでなく、そもそもの運動する習慣や環境をつくっていかなければならないと思っております。

委員からもお話しがありましたが、やはり小学校の方は、なわとび運動を含めて色々な工夫がされているところですが、先ほども申しましたとおり、中学校は部活があるので、部活動をしている子はいいのですが、それ以外の運動をしない子どもたちに対して、体育の授業だけでは、なかなか難しいところがあります。体育の授業でも運動できない苦手な子どもたちも、運動する楽しさや、みんなで体を動かす喜び、そうした機会を得ることが大切であり、得意不得意は別として、体を動かすということは良いことだ、健康に大事だということを意識することが非常に大切になりますので、そうした取組を学校全体、子どもたちの自主的な生徒会の色々な活動とか、そのようなところでできるように、次年度また機会を通して学校とも連携していきたいと思っております。先ほどもお話ししましたが、大学と連携をしながら、そうした取組も進めておりますので、大学の先生の力をお借りして、札幌の子どもたちにとって、そうした取組のポイントみたいなものや

課題を少しずつ明らかにしていきたいと思っております。

○道尻委員 持久力に関する種目というのは子どもがなかなか楽しんでできるものがないのかなとも思うので、難しいところだとは思いますが、専門の方や色々な知恵を取り入れていただいて、そういった取組を見つけることができると良いなと思いますので、よろしくをお願いします。

○長谷川教育長 ほかにはいかがでしょうか。色々ご意見が出ましたので、大学と連携して、これからもやっていくということですから、そのところを十分配慮、留意しながら、進めていただければと思います。この前の総合教育会議でも、この話題になりまして、市長、副市長からも、非常に大切なことだとお話しがありましたので、よろしく願いいたします。

それでは報告第1号については以上になります。

続きまして議案第1号は、公開しないことといたしますので、傍聴の方はご退席をお願いいたします。

〔傍聴者は退席〕

以下 非公開